

## 巻頭言

### ■ベストをつくせ!



徳島大学薬学部長

佐野茂樹

Shigeki Sano

ジミー・カーター元米国大統領の著書『なぜベストをつくさないのか』を読んだのは、確か高校生頃だったと思います。詳細はほとんど覚えていませんが、書名だけは今も心に刻まれています。

アメリカ南部ジョージア州出身のジミー・カーターが原子力潜水艦乗組員を志願した時、ハイマン・リコーバー提督（原子力潜水艦の父と呼ばれた人物）の面接を受け、海兵学校卒業時の成績を尋ねられます。カーターは「59番です」と誇らしげに答えました。当時、海兵学校卒業時の成績が二桁なのは、極めて優秀であることの証しだったのです。カーターは提督から褒められると、期待したのかもしれ

れません。けれども、リコーバー提督は「君はベストを尽くしたのか？」とさらに問いかけます。常にベストを尽くさなくても、これくらいの成績は取れるという思いだったのでしょうか、カーターは「いいえ、いつもベストを尽くしたわけではありません」と答えました。それに対してリコーバー提督は静かに『Why Not the Best?』という問いを投げかけます。カーターは何も答えることができなかつたと述懐しています。それ以降、この言葉を常に自らに問いかけながら人生を歩むようになったそうです。民主党の大統領候補として現職のフォード大統領を破り、第39代アメリカ合衆国大統領に就任したのは、本書が出版された翌年、1977年のことです。

大統領時代には冷戦のさなかにあつて人権外交を進めたため、弱腰と揶揄されることも多かったカーター元大統領ですが、長年対立していたエジプトとイスラエルの間でエジプト・イスラエル平和条約へとつながる合意（キャンプデービッド合意）を締結させ、大統領職を退いた後には、米国大統領経験者として初めて北朝鮮を訪問し南北首脳会談開催の仲介役を務めるな

ど、積極的な外交活動を展開しました。2002年には「数十年間にわたり国際紛争の平和的解決に尽力し、民主主義と人権を拡大させ、経済・社会開発にも貢献した」功績により、ノーベル平和賞が授与されました。「人は二つの愛を持たねばならない。一つは神への愛、もう一つは隣人への愛である。」これは、ジョージア州プレインズのマラナタ・バプテスト教会に籍を置くカーター元大統領が、常々語っている言葉です。

2017年4月に薬学部長を拝命してから早くも2年が経過し、新元号「令和」への改元と時を同じくして2期目の任期が始まりました。新しい時代の幕開けとともに薬学部の諸課題を担う重責に、身の引き締まる思いで本稿をしたためながら、40年ほど前に読んだ本に思いを巡らせた次第です。『Why Not the Best?』という言葉を深く噛み締めながら、「令和」という新しい時代も薬学部の学生・教職員の皆さんと共に着実な歩みを続けたいと心より願っています。



## 新学科長挨拶



薬学科長

**土屋浩一郎**

Koichiro Tsuchiya

**2**019年4月より薬学科長を拝命いたしました。佐野学部長をはじめ、教員、職員の皆様のご助言・ご協力のもと薬学部の発展に寄与してまいり所存です。まずご報告といたしまして平成30年度に薬学科（6年制薬学教育プログラム）に対する一般社団法人 薬学教育評価機構による薬学教育評価を受審し、本学部は薬学教育評価 評価基準に適合していると認定されました。本評価にご協力いただきま

した皆様方に深謝いたします。

さて、本学部では平成30年度入試から学科別の学生募集になり、またAO入試の導入等、入試方法が大きく変更となり、それに伴いアドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの点からカリキュラムを見直しました。薬学科では「薬剤師・薬学研究者・教育者」を目指して入学してきた人に対し、教養教育では基礎科学と科学的思考力の涵養そして専門教育ではモデル・コアカリキュラムに基づいた教育に加え、本学部独自の科目を提供し、さらには卒業研究を通じ、課題発展能力、問題解決能力、研究マインドと医療ニーズに対応できる能力を修得できるような体制を整えました。

さらに、医療系学部が集結している蔵本キャンパスの特長を活かしたIPE（専門職連係教育）を実践する「応用医療薬学」科目の新設、実務教育学分野を中心とした特徴ある実務実習の実施を通じて、薬学部の教育理念である

「インタラクティブ YAKUGAKUJIN（薬学が関係する諸分野の連携を基盤に、自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材）の育成」に則り、自らの能力を客観的に把握でき、物事を俯瞰的に捉え、進取の気風のもとに自立して未知の課題を解決できる人材を養成することを目指しています。おりしも平成31年4月2日には厚生労働省医薬・生活衛生局総務課長から「調剤業務のあり方について」通知が出され、また薬局・薬剤師の業務内容を見直す医薬品医療機器法（薬機法）改正案が国会に提出されたことから、「薬剤師」を取り巻く環境が劇的に変化しているとともに薬剤師の社会的責任が年々大きくなってきていることを痛感しています。これらの事態に対応できる人材の育成には大学教職員だけでなく学生およびステークホルダーの皆様の協力も必要となります。どうぞよろしくお願いいたします。



創製薬科学科長

**小暮健太郎**

Kentaro Kogure

**本**年4月より、創製薬科学科長を拝命しました小暮健太郎です。平成30年度から、6年制薬学科と4年制創製薬科学科に分けて入学試験を実施するようになり、新制度の創製薬科学科に所属する学生は現在1年生と2年生の2学年になりました。創製薬科学科では、将来創薬研究者とし

て薬学領域のみならず幅広い領域で活躍できる人材の育成を目指しています。皆さんにご紹介したいのは、昨年度から実施している創製薬科学科のユニークなオリジナル科目です。1年次入学直後から研究室で研究を体験できる「研究体験演習1」、体験した研究を論文にまとめる「学術論文作成法」、最先端のDDS研究を学ぶことができる「コアDDS講義」、自分の進路を考えるための「キャリアパスデザイン講義」など、全国でも珍しいユニークな科目を実施しました。受講した学生にとっては、とても有意気であったようで、彼らは高いモチベーションをキープして1年次を過ごせたようです。これらの取り組みが功を奏したのか、本年の志願倍率は、昨年を大きく上回りました。来年度も、この勢いを維持で

きるよう学科長として鋭意努力する所存です。なお、これら創製薬科学科の特色については、徳島大学薬学部ホームページ右側中央に「ソーセイちゃんの創製薬科学科紹介」というバナーがありますので、是非一度クリックしてください。創製薬科学科の魅力をご理解いただけたと思います。ちなみに、ソーセイちゃんとは、創製薬科学科のマスコットキャラクターで難波教授の研究室で生み出されたものです。今後、益々魅力のある創製薬科学科となるよう努めてまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 研究紹介

## ■ がん細胞の生存手法を逆に利用した DDS キャリアの開発 — 内因性アルブミン取り込み機構を介した創薬への挑戦 —



薬物動態制御学分野 准教授

異島 優

Yu Ishima

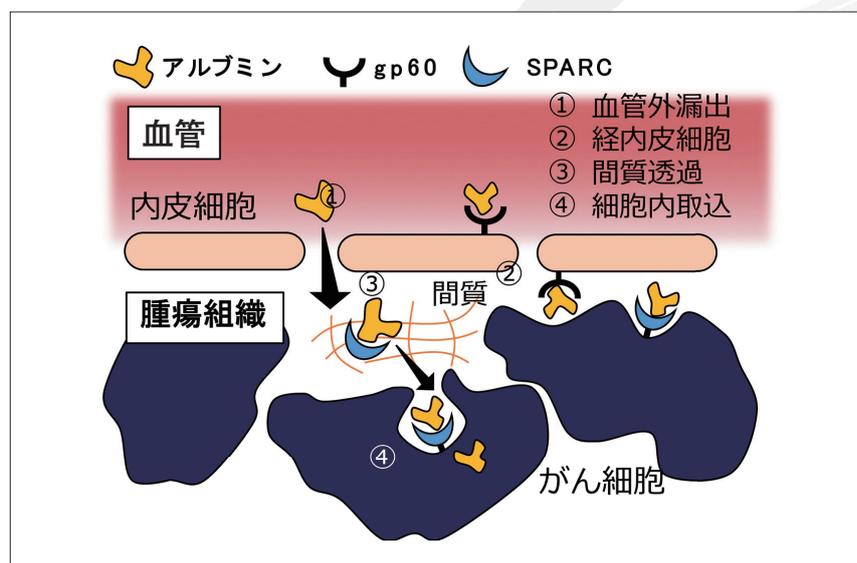
**国** 立がんセンターによると、生涯でがん罹患する確率は、男性62%、女性47%であり、実に『2人に1人』の割合という決して他人事ではない数字が報告されています。もちろん近年の医療技術の進歩に伴い、がん罹患したとしても完治される方も大勢いらっしゃいますが、がんの種類によっては、未だに予後が悪いものもあります。中でも膵臓がんは、がんと診断されてから5年間生き延びる確率が8%未満と極めて短く、特に予後の悪い難治性がんとして知られています。その難治性である理由として、膵臓がん組織の特徴的な微小環境による抗がん剤の送達性の悪さが一因であると考えられています。具体的には、「膵臓がん組織では血管数が乏しいこと」や「間質細胞の存在によるがん細胞への送達バリア」などが組織学的に指摘されています。したがって、効果的な薬物治療をするためには、これらの障壁を突破することが極めて重要となってきます。私たちは、難治性がんである膵臓がんに対する効果的な薬物治療法の開発を最終目標として、日々、基礎研究を行っています。

上記の最終目標のため、現在行っている研究である「血清アルブミン

(HSA) を用いたナノ粒子の開発」をご紹介します。ヒト血清中に最も多く含まれるHSAは、脂肪酸や薬物などの輸送、抗酸化作用など数多くの機能を有しているタンパク質です。血中のHSA濃度は栄養状態の指標になることから血液検査項目にも含まれており、聞いたことがある方も多いのではないのでしょうか？近年、がん細胞がこのHSAを積極的に取り込み、栄養源として利用する機構があることが報告されました。また驚くべきことに、比較的血管数が少ないがん種、つまり膵臓がんなどでこの機構が特に発達していることがわかってきました。この機構の詳細なメカニズムとしては、『血管内皮細胞膜上に発現しているgp60と呼ばれるアルブミン結合レセプターにより、HSAがトランスサイトシスを受けること』や『間質中に存在するSPARCと呼ばれるアルブミン結合タンパク質によりがん細胞へデリバリーされること』が提唱されています(下図)。したがって、この機構を逆に利用すれば、薬物治療が困難な膵臓がん細胞へ抗がん剤を効率的に送り込むことができるのではと考え、「トロイ

の木馬」のような薬剤を開発するべく、抗がん剤を封入したHSAナノ粒子の調製に着手しました。膵臓がんにも効率的に運搬しうる最適な粒子サイズなどの検討を重ね、最終的には20 nm程度の抗がん剤封入HSAナノ粒子を作製することに成功しました。

現在、ヒトすい臓がんをヌードマウスのすい臓に移植したヒトすい臓がん同所移植モデルマウスを樹立し、難治性であるヒトの臨床像にできるだけ近いモデルにおいて、抗がん剤封入HSAナノ粒子の治療効果を検討しているところです。また、このHSAを積極的に取り込む機構は、すい臓がん以外にも脳腫瘍においても認められることから、今後の展開としては、脳腫瘍も視野に入れて、検討を行っていく予定としています。HSAは、すでに臨床で使用されている安全性の高いタンパク質である上、抗体などと比較しても非常に安価なタンパク質であることから、副作用が少なく、効果的かつ安価な高分子抗がん剤として、近い将来に一人でも多くの患者さんを救えるように、研究室の教員・学生とともに研究を続けていきます。



## 国際交流

### ■ 東國大学校薬学大学（韓国）との学術交流



生命薬理学分野  
教授



生薬学分野  
准教授

#### 藤野 裕道 田中 直伸

Hiromichi Fujino Naonobu Tanaka

**東** 國大学校薬学大学 (College of Pharmacy, Dongguk University) と本学部は、平成24年に部局間学術交流協定を締結しており、毎年相互に教員が訪問し、活発な学術交流を行っています。なお、この協定は平成30年4月に大学間学術交流協定に格上げされており、ますます活発な交流が進むことが期待されます。

昨年訪問した山田教授と辻助教に続き、平成30年11月19日から21日の日程で藤野と田中が訪問し、20日に東國大学で開催された国際シンポジウム (The 4<sup>th</sup> Symposium

of Integrated Research Institute for Drug Development, College of Pharmacy, Dongguk University) にて、“The functions of receptors for prostanoids are tossed up and down by endogenous cognate and/or non-cognate prostaglandins as biased ligands” (藤野)、ならびに “Search for structurally unique bioactive natural products from plants and marine organisms” (田中) という演題で講演を行いました。シンポジウム後は東國大学周辺のレストランにて開催された懇親会に参加し、韓国宮廷料理とマッコリをたらふくいただきながら交流を深めました。

韓国といえばグルメです。昼食に東國大学の Chang-ik Choi 先生と一緒にいただいたサムゲタン (参鶏湯) が絶品でした。丸鶏ともち米、種々の生薬 (大棗や人参など) で作られる濃厚なスープ料理です。人参は、日本では主に漢方薬の構成生薬として用いられますが、韓国では盛んに食用されます。日本と韓国での人参の薬効に対する考え方の違いについての話が盛り上

がりました。また訪問時期が今までよりは少し早かったため、夜の屋台には最高の気候でした。

しかしながらバス停で待っていたにも関わらず、市内一周観光バスに無視されて取り残されるハプニングもありました。とは言え、そのおかげで地下鉄を乗り継いで、巨大銀色ドームである東大門デザインプラザを探索することもできました。

最後に、今回の訪問の機会を与えていただきました佐野学部長と東國大学校 Moon-Woo Chun 先生、滞在中お世話をしていただきました Young Hee Choi 先生と Chang-ik Choi 先生に感謝申し上げます。



### ■ ノースカロライナ大学チャペルヒル校との交流 症例検討ビデオカンファレンスについて



臨床薬学実務教育学分野 准教授

#### 阿部 真治

Shinji Abe

**急** 速にグローバル化が進む現在、臨床現場においても広い視点を有した薬剤師の養成が求められています。徳島大学薬学部ではグローバルな観点からの症例検討能力の醸成と、英語による医療人としてのコミュニケー

ション能力向上を目的として、2010年度より学部間学術交流協定校である米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校薬学部の Dennis Williams 准教授と共同で、希望学生を対象とした症例検討ビデオカンファレンスを実施しています。本プログラムでは両校の薬学部学生がビデオ会議システムを利用し、事前に提示した共通症例の薬物療法について英語によるディスカッションを行います。2018年度は2019年1月から3月にかけて、土屋浩一郎教授と佐藤智恵美 助教の協力のもと、3～5年次学生20名を対象として合計4回の症例検討ビデオカンファレンスを実施しました。本プログラムでは、臨床に即した高度な症例検討能力が求められるとともに、それをリアルタイムに英語でやり取りする必要があるため、当初は意思の疎通に苦労して

いました。しかし、回を重ねるごとに充実したディスカッションとなり、両校の学生にとって日米における医療制度や薬物療法の相違点を知る良い機会になったと思われます。今後も本プログラムを継続することで、海外における医療の実情やアメリカの大学での授業を身近に感じることが出来る機会を学生に提供し、グローバルに活躍できる薬剤師の養成につなげていきたいと考えています。



## ポストLEDフォトンクス研究所



有機合成薬学分野 教授

### 難波 康祐

Kosuke Namba

2019年3月よりポストLEDフォトンクス研究所医光融合研究部門の併任を仰せつかりました。ポストLEDフォトンクス研究所は、徳島大学が地域産業界と共に、次世代光源の開発および応用に取り組むために2019年3月に設置されたものです。

可視光より短波長側の「深紫外」、長波長側の「赤外」「テラヘルツ」の3つの光にアプローチし、各々の光の特性を活かした新しい産業創出を目指しています。すなわち、徳島県にはLEDバレイ構想の下、100社を超えるLED関連企業が集結していますが、可視光領域のLEDは産業として既に成熟期に入っています。そこで本研究所は、未開拓領域とされる可視光以外の波長領域（深紫外、赤外、テラヘルツ）へと踏み出し、徳島県および県内企業と協力して「新しい光」を利用した新産業の創出を目指すというものです。すでに、「光」の研究を専門とする多数の教員・研究員が本研究所に着任し、本年3月より常三島キャンパスにあるポストLEDフォトンクス研究所をスタートさせています。

ポストLEDフォトンクス研究所と薬学部は余り関係がないように思える

かもしれませんが、本研究所には新たな光源を医療に応用するための医光融合研究部門が設置されています。光と医療とを連携させる上で、光を利用する薬や診断薬の開発もまた欠かすことができません。当研究室では、特定の波長の光に応じて機能を発現する光応答性分子、呼気中のバイオマーカーと反応して波長を変化させる呼気診断プローブ、新しい光源を用いる新反応の開発などでポストLEDフォトンクス研究所と連携していく予定です。「光」を専門とする研究者の方々と話し合うことで、思いもよらなかった研究の方向性に気づくことが多々ありました。興味がある方は是非ポストLEDフォトンクス研究所にお立ち寄りいただき、「光」に関連した研究の可能性を探っていただければ幸いです。

## 薬学教育評価受審報告

薬学教育評価に関するワーキンググループ(WG)グループ長  
機能分子合成薬学分野 教授

### 大高 章

Akira Otaka

徳島大学薬学部は平成30年度に、薬学教育評価機構による6年制薬学教育プログラムの評価を終え、「薬学教育評価 評価基準」に適合と認定されたことを皆様にご報告申し上げます。薬学教育評価を無事終えることができたのは、薬学教育全般にわたる教員、さらに事務面から教育支援に携わっていただいている事務職員の常日頃そして今回の評価に際しての献身的な努力の結果と考えております。ここに、関係いただきました皆様に、WG

長として心より御礼申し上げます。評価結果は薬学部HP (<https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/research/jabpe.html>) に掲載されていますので、是非一度ご覧になって下さい。徳島大学の6年制薬学教育プログラムが総じて評価基準に準拠し、適切に行われていることがご理解いただけると思います。ここでは、優れた取り組みと評価された点は評価報告書に譲ることにし、6年制薬学教育において徳島大学が改善すべき事項を記させていただきます。

1. 医療人教育の体系化と統合的な目標達成度評価のための指標設定と評価の実施
2. シラバスの到達目標、学習方略、評価方法・基準などの記載不備の改善
3. 各学習領域に応じた適切な学習方略の設定
4. 「病院・薬局実務実習」評価の画一化を防ぐ評価方法の導入
5. 教育能力向上に関わるFD活動の活発化および教員の積極的な参加
6. 6年制薬学教育プログラムの内部質保証を図るための組織整備と組

### 織運営

上記の6点が改善すべき点として、評価機構からの指摘を受けました。評価結果全体に影響を与えるものではありませんが、学部教育改善に向けた指針とすべき事項ではないかと考えています。特に、「6年制薬学教育プログラムの内部質保証を図るための組織整備と組織運営」が他の5つの事項にも関与します。

さて、7年サイクルで行われる薬学教育評価は令和元年度をもって、第一サイクルが終了し、令和2年度から第二サイクルに入ります。現在、評価機構では第二サイクルに向けた評価基準の策定が行われています。評価作業の簡素化、国公立と私学の差別化など、種々の論議が行われており、どのようなものになるかまだ見えない点もありますが、上述の「内部質保証」は重要なキーワードの一つとなっており、「内部質保証」担保に向けた学部全体としての活動が今後必要となります。皆様のご協力の下、教育環境の向上に結び付けることができると考えております。

## 創薬プロジェクト演習2018の紹介



薬品製造化学分野 助教

**猪熊 翼**

Tsubasa Inokuma

平成30年4～5月に創薬プロジェクト演習を実施いたしました。学部3年生32名が受講し、仮想製薬企業の研究者として各々が新薬開発案を持ち寄り創薬展開を模索、一つのプロジェクトにまとめました。例年同様、座学で得た知識をフル活用しつつ、各々が独自に調査した最先端技術がふんだんに盛り込まれた意欲に溢

れた発表が繰り広げられました。また、京都大学にも遠征し、徳大発のプロジェクトを京大生と同じ壇上で発表しました。京大生の発表と比較しても遜色ない出来であり、審査では徳島大のプロジェクトが最も優れている、と栄誉ある評価を受け、発表者の自信にもつながったようです。

受講生からは『これまで触れられなかった事を多く体験できた』『新薬を生み出す面白さと難しさが分かった』

という感想が多く寄せられ、座学のみではなしえない創薬マインド醸成に貢献できたと思っております。

2020年度より新カリキュラム1期生が本演習対象学年である3年生に進級します。本演習は創製薬科学科が担う次代の創薬人育成のための目玉カリキュラムの一つです。本取り組みを通じて新時代を背負って立つ人材を輩出してみたいと思いますので、引き続きご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。



最終プレゼンテーションでの発表風景

## 退任教員挨拶



医薬品病態生化学分野 准教授

**新垣 尚捷**

Naokatsu Arakaki

本年3月31日をもって、定年退職を迎えました。徳島大学歯学部で教員生活をスタートし、鹿児島大学歯学部で10年、そして母校で20年、トータル約38年間の教員生活を終えました。ほぼほぼ良い環境で

仕事ができるのも、共同研究者の皆さんと一緒に仕事をした学生さん、そして事務の方々のおかげだと思っております。ここに厚くお礼を申し上げます。

私は、薬学部へ赴任した後に薬剤師免許を取得したぐらいですから薬剤師の仕事内容も知らず、薬剤師教育に対するビジョンもなく、講義をし、実習をしてきたように思います。6年制の薬学部の教員としては失格でした。定年を迎えて正直ホッとしております。研究面ではたくさんの興味深い発見がありました。「ミトコンドリアは激しく動く。なぜ？そのメカニズムは？」など、興味深い謎があります。今後どのような研究成果が出るのか楽し

みにしているところです。「定年、おめでとうございませう。」より「定年退職、これからの時間楽しみですね。」と言っていただくとワクワクしてきます。来年退職される方にはそのように声をかけてもいいのではないのでしょうか。しばらくは、「現代版の高等遊民的生活」を模索していきたいと思っています。

最後に徳島大学薬学部のますますの発展を祈念して、退任の挨拶とさせていただきます。



## 学生の活躍

### 国際学会『XXIII IRT』に参加して



大学院薬科学教育部博士後期課程1年  
生物有機化学分野

#### 和田 知也

Tomoya Wada

2018年8月26日から30日までの5日間、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) にて

開催された The 23rd International Roundtable of Nucleosides, Nucleotides and Nucleic Acids (XXIII IRT) に参加させていただきました。本学会は2年に1度、DNAやRNAのようなオリゴヌクレオチドやそれらを構成するヌクレオシド、ヌクレオチドに関連した研究を行っている研究者が、世界中から集まって研究討論を行う学会です。

私は「Elucidating dynamic interactions between siRNA and proteins using a pair of nucleoside chemical probes」という演題でポスター発表をさせていただきました。拙い英語での発表でしたが、よく学術論文でお名前をお見掛けするような著名な先生方

や核酸創薬分野において先陣を切っている企業の研究者の方々と質疑応答することができた経験は、自分が世界に通用する研究をしているという大きな自信になりました。また、海外でご活躍されている日本人研究者の方々と交流させていただいたことで、自分の将来の進路についても視野が広がり、大変実りの多い学会参加になりました。

最後になりましたが、国際学会発表の旅費支援を頂きました佐野茂樹薬学部部長、発表の機会を頂きました南川典昭教授をはじめ、関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます。



薬学部3年  
薬学部準硬式野球部

#### 山下 竜介

Ryosuke Yamashita

私たち薬学部準硬式野球部は現在3年生6名、2年生8名、1年生9名の23名が所属しており、普段

は月曜日と土曜日の午後に蔵本キャンパスグラウンドで練習を行なっています。部員は野球経験者だけでなく初心者も多く所属しており、部員同士の仲も良く、全員で協力して楽しく活動しています。また、新歓イベント、飲み会、OB戦などを通して現役を引退されたOB・OGの方々と交流もあり、先輩後輩の良い関係も持つこともできています。現在の薬学部には準硬式野球部出身の教授も数名勤めていらっしゃるなど、歴史ある部活となっています。

現役チームは、年に数回程度他学部野球部との練習試合も実施し、毎年8月に参加している関西薬学生連盟準硬式野球大会へ向けて活動しています。

この大会では毎年関西各地で開催地が変わるため大会日程中の開催地の観光も含めた一大イベントとなっています。大会中は選手、マネージャー共に一丸となって勝利を目指します。僕はそんなチームがとても好きで、この部活に入っていて本当に良かったと思います。

また、準硬式野球部は薬学部の自治会の運営、4月の新入生歓迎会の開催を担当しており、責任を持って担当の仕事を果たしています。

今年は自分たち3年生の現役最後の年でもあるので大会勝利を目指して全員で楽しく活動していこうと考えています。

## サークル紹介

### 薬学部行事予定

令和元年7月～令和2年3月

令和元年

8月1日(木)～31日(土)

8月8日(木)

10月1日(月)

11月2日(土)

11月2日(土)～3日(日)

11月16日(土)

夏季休業

オープンキャンパス

後期授業開始

開学記念日

ホームカミングデー

大学祭

第49回徳島大学薬学部

卒後教育公開講座

11月22日(金)～23日(土・祝)

11月30日(土)

12月13日(金)

12月25日(水)～1月7日(火)

令和2年

1月18日(土)～19日(日)

2月25日(火)～26日(水)

3月12日(木)

3月23日(月)

3月25日(水)～31日(火)

AO入試

薬学共用試験 OSCE

薬学共用試験 CBT

冬季休業

大学入試センター試験

一般入試 (前期日程)

一般入試 (後期日程)

卒業式・修了式

学年末休業

## 薬学部関連ニュース



## 教員の異動

平成30年12月31日付退職	臨床薬学実務教育学分野	久米 哲也 教授
平成31年1月1日付昇任	臨床薬学実務教育学分野	阿部 真治 准教授
平成31年3月31日付退職	医薬品病態生化学分野	新垣 尚捷 准教授
平成31年4月1日付昇任	生物有機化学分野	田良島 典子 講師
平成31年4月1日付転出	衛生薬学分野	田中 保 准教授 (大学院社会産業理工学研究部 教授へ昇任)

## 学会賞等受賞

## 【教員の受賞】

## ■康楽賞

○受賞者：辻 大輔 助教  
(創薬生命工学分野)  
受賞年月日：平成31年2月5日  
表彰団体名：公益財団法人康楽会

## ■大学院医歯薬学研究部長表彰

○受賞者：石田 竜弘 教授  
(薬物動態制御学分野)  
受賞年月日：平成31年2月7日  
表彰団体名：徳島大学大学院医歯薬学研究部

## ■生理学技術研究会功績賞

○受賞者：北池 秀次 副技術部門長  
(技術支援部 蔵本技術部門)  
受賞年月日：平成31年2月14日  
表彰団体名：大学共同利用機関法人自然科学研究機構

## 【学生の受賞】 (学年は受賞時)

## ■優秀ポスター賞

受賞者：湧川 朝治 (D2)  
受賞年月日：平成30年10月13日  
表彰団体名：第3回黒潮カンファレンス  
受賞内容：レンコン由来化合物の抗アレルギー効果

## ■フローインジェクション分析論文賞

受賞者：住友 琢哉 (B6)  
受賞年月日：平成30年11月16日  
表彰団体名：日本分析化学会フローインジェクション分析研究懇談会  
受賞内容：Internal Standard-Amplitude Modulated Multiplexed Flow Analysis

## ■2018 Tokushima Bioscience Retreat 若手研究者奨励賞

○受賞者：西田 航大 (M2)  
受賞内容：Development of a novel methodology for the synthesis of peptides with diverse unnatural amino acids

○受賞者：竹瀬 俊輔 (B6)  
受賞内容：Liposomal oxaliplatin promotes antitumor immunity in combination with cancer immunotherapy

受賞年月日：平成30年11月19日  
表彰団体名：徳島大学大学院医歯薬学研究部

## ■学生優秀発表賞

受賞者：西田 浩平 (B6)  
受賞年月日：平成30年11月23日  
表彰団体名：第134回日本薬理学会近畿部会  
受賞内容：阿波晩茶由来 NFAT シグナル抑制化合物の同定とその標的分子の探索

## ■Poster Presentation Award

受賞者：Rumana Yesmin Hasi (D1)  
受賞年月日：平成30年11月30日  
表彰団体名：The Third International Symposium on Rice Science in Global Health (ISRGH2018)

受賞内容：Amounts of Glycosylinositol Phosphoceramide and Phytoceramide 1-phosphate in Vegetables

## ■Young Investigator's Award

受賞者：真島 大 (D1)  
受賞年月日：平成30年11月30日  
表彰団体名：The Third International Symposium on Rice Science in Global Health (ISRGH2018)

受賞内容：Tocopheryl succinate liposomes regulate lipid accumulation in 3T3-L1 adipocytes

## ■10th International Peptide Symposium Peptide Science Oral Presentation Award

受賞者：小宮 千明 (D3)  
受賞年月日：平成30年12月7日  
表彰団体名：日本ペプチド学会  
受賞内容：Preparation of protein thioesters enabled by carboxypeptidase-mediated C-terminal specific hydrazinolysis

## ■10th International Peptide Symposium JPS Excellent Poster Presentation Award

○受賞者：成瀬 公人 (D2)  
受賞内容：Development of method for deprotection of N-terminal thiazolidine derivative using copper salt for chemical protein synthesis

○受賞者：古曳 泰規 (D1)  
受賞内容：Development and application of novel protein labeling reagent "SEAL"

受賞年月日：平成30年12月7日  
表彰団体名：日本ペプチド学会

## ■ISNM2018 The Best Poster Award

受賞者：立花 洸季 (M1)  
受賞年月日：平成30年12月7日  
表彰団体名：12th International Symposium on Nanomedicine

受賞内容：Sphingosine-1-phosphate (S1P) affects the secretion of high density lipoprotein (HDL)-constituted protein

## ■学生発表奨励賞

受賞者：丹羽 莞慈 (D1)、大橋 栄作 (D1)  
吉野 悠希 (M2)、岡本 翼 (B6)  
受賞年月日：平成31年1月12日  
表彰団体名：日本薬学会中国四国支部

## ■康楽賞

受賞者：小宮 千明 (D3)、木口 美沙妃 (M2)  
松岡 里英 (B6)、岡本 翼 (B6)  
受賞年月日：平成31年2月5日  
表彰団体名：公益財団法人康楽会

## ■JPS Travel Award

受賞者：成瀬 公人 (D2)  
受賞年月日：平成31年3月6日  
表彰団体名：日本ペプチド学会  
受賞内容：Development of Novel Ring-Opening Reaction of N-Terminal Thiazolidine for Chemical Protein Synthesis

## ■徳島大学学生表彰

受賞者：小宮 千明 (D3)、成瀬 公人 (D2)  
湧川 朝治 (D2)、岡 尚生 (D1)  
古曳 泰規 (D1)、住友 琢哉 (B6)  
西田 浩平 (B6)、金山 忠史 (B4)  
又吉 かれん (B4)  
受賞年月日：平成31年3月12日  
表彰団体名：徳島大学

## ■長井賞

受賞者：竹瀬 俊輔 (B6)、桐山 慧 (B4)  
受賞年月日：平成31年3月22日  
表彰団体名：徳島大学薬学部

## ■学部長特別表彰

受賞者：高橋 里奈 (B5)、谷垣 雄都 (B5)  
友成 奈央実 (B5)、松尾 祐里 (B5)  
三村 美夕紀 (B5)  
受賞年月日：平成31年3月22日  
表彰団体名：徳島大学薬学部

## 学部等支援基金(薬学部) ご寄附のお願い

薬学部は、職種にかかわらず多様な薬学領域の様々な分野に対応可能な人材「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」育成を教育理念とし、薬学の新たな未来の創造に貢献するため、教育研究活動を推進しています。このような取組を発展させるため、薬学部・薬科学教育部における教育研究、国際交流及び社会貢献等の様々な活動に基金を活用させていただきたく予定です。皆さまからのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

徳島大学へのご寄附は、徳島大学が発行する「寄附金領収書」を添えて確定申告を行うことにより、税制上の優遇措置を受けることができます。

●お申込み方法等、詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/foundation/>



発行：徳島大学  
編集：薬学部広報委員会  
広報委員：難波康祐、藤野裕道、植野 哲  
佐藤陽一、中山 淳、北池秀次

URL： <https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/>  
〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1  
徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係  
E-mail： [isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp](mailto:isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp)

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、令和元年の12月頃を予定しております。